「世の中の人の心は目かるれば……」追考

――『伊勢物語』第四六段　贈答歌の痕跡――

妹尾好信

はじめに

平成五年九月二十六日、第四十三回西日本国語国文学会（於大分県労働福祉会館）において、迫徹朗氏の「歌のゆくえ――伊勢物語四十六段をめぐって――」という研究発表を拝聴した。『伊勢物語』第四六段は、本来、昔男と親友との贈答歌から成っていたのだが、親友の贈歌がいつの間にか地の文に紛れてしまったということを考証的に論じられた刺激的な御発表であった。同発表の内容は、その後、『尚絅大学研究紀要』第一七号（平成六年二月）に、さらに補強された形で同題の論文として活字化された。本稿は、氏の御高説の末尾に付して、若干の補足を試みようとするものである。

一

迫氏の論をなぞるようになるが、話の順序として、まず、『伊勢物語』の本文の紹介から始める。第四六段は、次のようにある。

むかし、をとこ、いとうるはしき友ありけり。片時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり。月日へておこせたる文に、「あさましく対面せで、月日の経にけること。忘れやし給ひにけむと、いたく思ひわびてなむ侍る。世の中の人の心は、目かるれば忘れぬべきものにこそあめれ」といへりければ、よみてやる。

目かるともおもほえなくに忘らるゝ時しなければ面影にたつ

（引用は、岩波文庫『伊勢物語』（大津有一校注、昭和三九岩波書店）による。傍線引用者、以下同じ）

親友が地方へ旅立ち、何箇月か経って手紙を寄こして来たので、昔男がそれに答えて歌を詠んだという話である。親友の手紙は散文で綴られていたが、昔男はそれに和歌で答えたということになっている。それも別段不自然ではないが、手紙の末尾には和歌が添えられるのが当時の常識であったかと思う。そこで、友人が昔男に寄こした手紙を見ると、末尾の一文が非常に和歌に近い形になっていることがわかる。傍線を付した部分がそれで、第四・五句のリズムが整わないが、一応、三十一文字から成っている。これを昔男の詠んだ和歌と比べてみると、「目かる」「忘る」の二語が共通し、しかも、親友が「目かれると忘れてしまう」と言っているのに対して、昔男は「目かれるとは思えないから、忘れる時はない」と反論した形になっている。つまり、昔男の歌は、友人の手紙の末尾の一文の

言葉に即して詠まれているのである。贈歌の言葉を使って返歌するのは贈答の定石である。もし傍線部が和歌であるなら、両首はまことにうまく対応した贈答歌ということになる。

二

和歌に酷似したこの一文は、本来は独立した和歌だったのではないか、そういう疑問は当然出てくるであろう。現存する『伊勢物語』の伝本で、この部分が明確に和歌として記されているものはなく、そういう木が存在した記録もないから、散文で書かれた手紙の一部として扱われてきたのは当然なのであるが、迫氏が指摘された通り、早くこの部分が和歌ではないかということを考えたのは、賀茂真淵（元禄一〇〈一六九七〉～明和六〈一七六九〉）であるようだ。

真淵は、その著『伊勢物語古意』（宝暦三〈一七五三〉頃成立）で、次のように述べている。

（前略）依て思ふに、世の中てふよりは、昔の男のやりたる哥なるべし、故に古本のむねを左に挙ぐ、

昔男最華美友在計利、得不去路爾往計利、陰精火歴而遣有文爾、浅猿得右得不対面月日之経寝留事、忘為将給與痛念偲乍侍、

世間之人心波目離者可所忘者爾社在禮
與言遣有計禮者、○此所にかへしと有つるんを、さてはことはりなしとて、後にもうせしならん、
目離雖所思鳴爾所忘時志無者面影爾立

かくする時は贈答のうた也、ふかくふるき書見ん人正したまへ、

（『賀茂真淵全集』第一六巻〈昭和五六　続群書類従完成会〉による）

ここで、真淵は、「古本」なる本を示して本段の解釈をしている。この本は、定家本で「月日へておこせたる文に」とある部分が「月日へてやりたる文に」とあり、「といへりければ、よみてやる」とある部分が「と云遣たりければ」とあり、手紙を送ったのは昔男、「目かるとも……」の歌の詠者は親友ということになって、少々ややこしいのであるが、その辺の相違はさておき、真淵は、傍線部のように、手紙の末尾の一文を本来和歌であったと考えた。欄外注にも「此めかるれはより下は哥なるを、今本にはあやまるならん」云々と記しており、第三句以下が誤写によって和歌の定型を失い、地の文に紛れてしまったものだとの考えを示している。そして「古本」の本文を引用しているのだが、ここでは「世の中の人の心は……」の部分が独立した和歌の形で書かれており、贈答歌になっている。

ここで真淵の示した「古本」とは、いかなる本なのであろうか。

三

引用された本文で明らかなように、「古本」とは漢字で表記されており、真名本の一種であることがわかる。そこで、通行の真名本の該当部分を引くと、

昔男、最華美友在計利。片時得不去思計流乎、人之国江往計流

乎、路爾往爾計利。陰精火精歴而遺有文爾、「浅猿得右得不対面恒娥火精之経寝留事。忘哉為給計無與、最痛思侘乍侍。世中人之心者被目離者可将忘物爾社在禮」與云遺有計禮者、目離友所念鳴丹所忘時志無計禮波面影爾立

（山田清市氏『伊勢物語の校本と研究』〈昭和五二　桜楓社〉により、私に句読点と引用符号を付した。以下同じ）

とある。「路爾往爾計利」の部分、『続群書類従』所収本には「最哀與思而別爾計利イ」と傍注があるが、その方が定家本系の本文に即した形になる。「路爾往爾計利」とあるのは、広本系に「かたときもえさらぬみちにいきけり」（宮内庁書陵部蔵阿波文庫本）とある本文と接触して生じた混乱であろうか。この真名本では、傍線部分が手紙の末尾の一文に当たるが、和歌として独立させた書き方はなされていない。これでは贈答の形になっているとは言えない。しかしながら、傍線部分は真淵が引用した「古本」の本文と小異があるものの、真淵が読んだように、「よのなかのひとのこころはめかるればわすられぬべきものにこそあれ」と読めそうである。特に末尾が「物爾社在禮」という形で一致しており、「ものにこそあれ」としか読めないことに注意したい。これは定家本系本文の「ものにこそあめれ」から離れて、和歌の第五句の七字句の定型を意識した表記と考えられる。ちなみに、『伊勢物語』中に見える助動詞「めり」の使用例について、真名本の表記を見ると、

○消えはてぬめる（第二四段）―消終寝目留

○忘れぬるなめり（第三六段）―忘寝留何目梨

○ぬるめる人に（第一二一段）―沾目流人爾

のようになっており（傍点は引用者）、「目留」「目梨」「目流」と、いずれも万葉仮名風の表記になっている。少なくとも、本例が「ものにこそあめれ」と読めないことは間違いない。

真名本の表記はこのように和歌を志向した形になっている。これは、真名本がもともとこの部分を独立した和歌として扱っていたことを示しているのではないか。つまり、真淵が示したような形が真名本本来の形なのではないかと思う。定家本のように地の文の一部として書かれたものであれば、「忘れぬべきものにこそあめれ」を「忘られぬべきものにこそあれ」と、わざわざ一首の和歌として自然に読める形に改変して記す必要はなかろう。通行の真名本は、定家本などの形に合わせて地の文に埋没させて書かれたと見るべきであろう。真淵の引用によると、本段冒頭第二文は、「得不去路爾往計利」とある。通行の真名本には「片時得不去思計流乎、人之国江往計流乎、路爾往爾計利。」とあって、このままでは文意が通り難い。先にこの点に触れて、真名本の「路爾往爾計利」は広本系の本文に接触したための混乱であろうかと述べたが、実は逆で、本来は真淵の引く「古本」のごとく「得不去路爾往計利」とあったのだが、定家本系本文の「片時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり」の形に直された際に、不用意にもとの形の一部が残された可能性もあろう。真淵の言う「古本」は、

彼の言う通り、かなり古い形の『伊勢物語』本文を反映した真名本の一形態であったかも知れない。広本系の本文「かたときもえさらぬみちにいきけり」も、このままでは文意通じ難く、混乱が見られるが、これも定家本のような本文と、「古本」の「えさらぬみちにいきけり」（「やむをえぬ事情で、旅立った」の意）とが交じり合って生じた混態本文と考えられるのである。

では、真淵の参照した「古本」なる本に、「世の中の人の心は……」の部分が独立して書かれており、贈答歌として扱われていたのかというと、実はそうではない。破線部分で、真淵は、「かくする時は贈答のうた也。ふかくふるき書みん人正したまへ」と言っている。これは「古本」の本文の形態を改変したことを言ったものである。迫氏が、前掲論文で、いみじくも、「では真淵の拠った古本では本当に独立していたのかと申しますと、真淵が「古本のむね」と言い、また「かくする時は」と言ったのは、その本においても独立していないが、独立させると四十六段の真意が明らかになると考えていたのだと推測されます」と言われた通りなのである。この点は、真淵の使用した「古本」も、通行の真名本と同じ形であった。真淵は、「世の中の人の心は……」を一首の歌として独立させるのがこの段の本来の形であるから、今後の学者はこれを正すように求めているのであるが、おそらく妥当な意見であろうと思う。

四

しかしながら、真淵の提示した説は、やはり実在する本文形態を恣意的に改変するものであったためか、以後の学者にほとんど踏襲されなかったようである。

わずかに、真淵の門人の一人である建部綾足（享保四年（一七一九）～安永三年（一七七四））が、その編著『旧本伊勢物語』（明和六年（一七六九）刊、『伊勢物語』の本文を万葉仮名で表記した一種の真名本）において、真淵が示したのと同様、次のように本段を贈答歌として記している。

○昔。男。痛善。友在来。片時吉不去相思。計流尓。他国方往計留乎。痛哀。止思而別尓来。月日歴而遺有文示

浅猿宇此吉対面泥。月日乃経眼事。忘哉為給劔止。痛痛久念和毘管遣

世中乃人心者目離礼婆忘奴便吉物尓社在礼止云遺有計礼婆

目離友無思経仁所忘時之無礼婆面影仁立

（木村晨・瀬尾邦雄・柳田忠則氏編『真名本 伊勢物語 綾足校訂』（翰林書房 平成七）の版本影印による）

第二文が「方時吉不去相思計流尓。他国方往計留乎。痛哀止思而別尓来」とある点は通行の真名本とは異なり定家本系の本文に近づいているが、その他は通行の真名本とも、また真淵引用の「古本」ともほぼ一致している。「吉対面泥」を「エアハデ」と読んでいる

点は、真淵引用の「古本」とも定家本系の本文とも異なり、また、「忘哉為給劒止。痛痛久念和毘管遣」とある所は、真淵引用の「古本」の「忘為将給與痛念倦乍侍」とは相違するが、通行の真名本の「忘哉為給計無與、最痛思侘乍侍」に一致し、定家本系の本文とも齟齬しない。このように、『旧本伊勢物語』の本文は、真淵が『伊勢物語古意』に引用した「古本」をそのまま利用したものでないことは確かだが、「世の中の人の心は……」を歌として認め、独立させて記した点は、真淵が手を加えて示した「古本」の本文に倣ったものと考えられる。近世における唯一の真淵説踏襲の例と言えよう。

五

ところで、大分県臼杵市の臼杵図書館には、『伊勢物語抄』と題する天・地・人三冊から成る『伊勢物語』の注釈書が蔵される。享和二年〈一八〇二〉三月付けの「秋田やすのり」なる人物の序文を有しており、『伊勢物語』の本文を適宜分割しつつ引用し、注釈を加えた書である。詳しい紹介は別の機会に譲るが、同書の第四六段本文中に、このことに関係する傍注が付されている。『伊勢物語』本文は定家本系の流布本系本文（いわゆる根源本）に近い。

月日経てをこせたる文に。あさましくえ対面せで月日へにける事。忘れやし給ひけんといたく思ひ侘てなん侍。世中の人の心は。めがるればわすれぬべきものにこそあめれと云りければ。

よみてやる

（国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。濁点および句点は原文のまま）

この『伊勢物語』本文の△印を施している部分に傍注して、「真名本には一首とわかてり。今の本にはかく本文の内に入たる故、文の詞とまぎらはし」（句読点は引用者）と記している。通行の真名本では贈答の形になっていないので、ここで「真名本には一首とわかてり」と言うのは当たらない。ここで言う真名本とは、綾足校訂の『旧本伊勢物語』をさしているのであろうか。もっとも、他の箇所で真名本を引用しているのを見ると、『旧本伊勢物語』ではなく、通行の真名本に近いので、そうとも言えない。例えば、第四段で、「ほいにはあらで。真名本に。穂尓不有と書り」とあるのは、『旧本伊勢物語』の「火耳波安良泥」ではなく、明らかに通行の真名本の「穂爾者不有」に近いといった具合である。もし『旧本伊勢物語』以外に、真淵の用いた「古本」のごとく贈答歌として載せている真名本が当時存在していたとしたら、それはまた興味深いことであるが、今は何とも言えない。

六

通行の真名本は、具平親王撰と伝えられるが、実際は南北朝期の成立と考えられており、『河海抄』に二四箇所引用された諸例が文献に見える最も古い例ということである。以後、『万水一露』『孟津抄』『岷江入楚』などの『源氏物語』古注に引かれ、中世の『伊

勢物語』古注でも、『経厚講伊勢物語聞書』その他に引用されているという（木村晟氏、前掲『真名本 伊勢物語 綾足校訂』解題）。前述のように、真名本では「世の中の人の心は……」が和歌として自然に読めるように書かれているので、本来、贈答の形で記されていたのであるならば、中世の頃、真名本以外にも、贈答として記す本が存在していた可能性は十分にあろう。現存本には見出せずとも、古注の類にでもその痕跡が見られないであろうか。

実は、その一例になりそうな事象が存在する。それは、宮内庁書陵部蔵の『伊勢物語抄』、いわゆる『冷泉家流伊勢物語抄』である。これは、中世期に多く作られた冷泉家流の古注の代表として、片桐洋一氏が『伊勢物語の研究』（研究篇）（資料篇）（昭和四三・四四 明治書院）で考察され、翻刻もなされているものである。この書では『伊勢物語』の本文は引用されていないので、念頭に置かれている本文がいかなるものであるかは、注釈文によって判断するしかないのであるが、第四六段の注の全文は次のようにある。

いとうるはしき友達とは、有常と業平也。〈うるはしき友とは、よき友の義也。〈人の国へ行といふは、他国へ行といふ義也。此は、かひの国へ行く也。有常か甲斐守に成て行をいふ也。〈めかるとは、目別る也。久不見心也。哥無義。〈月日へておこせたりし文とは、有常か許より業平のもとへおこせたりし文也。哥に無義。

（宮内庁書陵部蔵本の紙焼写真による。私に句読点を付した）

昔男を業平、友達を有常とし、有常が甲斐守になって赴任した時のこととするように、具体的な人名や事件を当てて考証するのは冷泉家流の古注釈の特徴であるが、荒唐無稽な注が少なくない中で、本段の注については概ね穏当であると言えよう。しかし、ここで問題にしたいのはそういうことではない。私に傍線を施したように、本段の注の中に、①「哥無義」・②「哥に無義」と、段中の和歌に関する注が二箇所あるのである。どちらも、歌に関して特に注すべきことがらはない、と言っているのであるが、二度記しているのは、本段に二首の和歌が想定されているからではないだろうか。現行の『伊勢物語』の本文に照らして、注の順序には若干乱れがあるようであるが、最後の②「哥に無義」が本段末尾に置かれた「目かるとも……」の和歌に関する注だとすると、それより前にある①「哥無義」は、「世の中の人の心は……」が一首の歌として扱われており、それをさして言っていると見ざるを得ないであろう。本書が念頭に置いている『伊勢物語』の本文は、真淵が想定したのと同様に、第四六段を贈答の形で記した本であり、二箇所の歌に関する注は、その痕跡を示すものと考えられるのではないかと思うのである。

七

ところで、この書陵部蔵『伊勢物語抄』と近似した内容を持つ本に、広島大学蔵『千金莫伝』がある。この本は各段の注の前に『伊勢物語』の本文を載せている。それは明らかに定家本系の本文であ

り、第四六段に関しても、現行の定家本系本文と相違はない。もちろん和歌は一首だけである。そして、注は次のようにある。

いとうるわしき友とは、有常と業平となり。うるわしき友、能友なり。人の国へいきとは、他国へ行なり。是は、甲斐の国へ行なり。有常か甲斐守に成て行を云。めかるとは、目別る。久敷みへすなり。おこせたる文とは、有常か許より業平に越たる文。哥に別義なし。只人の習にて、久敷なれはうとくなる物なれは、業平の心もいたくいふかしう思ふなれは、読て遣す。月日のへにける事と句をきりて、事の下へよの字を入る心にみるへし。事よと云意也。

（「翻刻平安文学資料稿」第三期・第一巻『定家流 伊勢物語 千金莫伝』〈平成七 広島平安文学研究会〉による）

ここでは、和歌に関する注は傍線を施した「哥に別義なし」一箇所だけである。となると、これは「目かるとも……」の歌をさすことになろうか。先の書陵部蔵『伊勢物語抄』の注をここまでの記事と比較したとき、①「哥無義」を除くと、ほぼ『千金莫伝』の記事に一致することがわかる。また、末尾の「 月日へておこせたりし文とは、有常か許より業平のもとへおこせたりし文也。哥に無義」には、『千金莫伝』の「おこせたる文とは、有常か許より業平に越たる文。哥に別義なし」が対応するから、あるいは、①「哥無義」で終わっていた書陵部蔵本の原形に、『千金莫伝』のような異本からこの部分にあたる注を増補した際に、不用意に「哥に別義なし」に当たる②「哥に無義」までを書き記してしまい、同じ「目かるとも……」の歌に関する注である①「哥無義」と②「哥に無義」が重複する結果になったとも考えられる。

が、注意すべきは、書陵部本にないその後の破線部分である。前半は有常が業平に手紙を送った理由を述べており、「月日のへにける事と」以下は、その手紙文の読解法を説いているのだが、「只人の習にて、久敷なれはうとくなる物なれは」とは、「世の中の人の心は……」の部分を解釈したものである。そして「業平の心もいたくいふかしう思ふなれは、読て遣す」とある。「読て遣す」とあるのだから、歌を贈ったと言っているわけで、それはとりもなおさず「世の中の人の心は……」が歌と認識されていたことを示すものであろう。「哥に別義なし」とは、やはりこの部分をさすのであり、「目かるとも……」の歌をさすのではない可能性が高いと言えよう。

おわりに

以上、現存する伝本に全く見られない形の本文がかつて存在していた可能性を示す事象を指摘してみた。これだけでは、だから『伊勢物語』第四六段には、本来和歌が贈答の形で載っていたのだと結論するわけにはいかないが、今後、さらにさまざまな資料を検討することによって、その痕跡がまた別の形で発見されることもあろうと思う。今回はその一例の報告である。最後に、改めて迫徹朗氏の学恩に感謝する次第である。

――広島大学文学部助教授――